

県内最古の村の鍛冶屋

現在、私たちの身のまわりで鍛冶屋を見ることは、ほとんどなくなりました。しかしながら、皆さんの記憶の中には、今でも赤く熱した鉄を打ち鍛えて道具を作る職人の姿を思い浮かべられる方も多いのではないのでしょうか。

今回は市内の発掘調査で見つかった、県内最古の鍛冶を行なった作業場跡について取り上げます。このような痕跡を鍛冶工房跡と呼びます。

この鍛冶工房跡は、平成34年に実施された市内北東部のおおつ野地内にあつた八幡脇遺跡や尻替遺跡の発掘調査で見えられました。これらの遺跡は霞ヶ浦(土浦入り)北岸の同一台地上にありました。両遺跡内ではともに古墳時代初め頃(4世紀代)の村の跡が見つかり、その中に鍛冶工房跡が1軒ずつ確認されました。ここでは、良好な状況で見つかった八幡脇遺跡例を取り上げます。

八幡脇遺跡で見つかった村の跡は9軒の建物跡で構成され、鍛冶工房跡以外にもメノウ製の勾玉などの玉類を製作した工房跡3軒も確認されました。一見すると専門の技術を持った職人が働き暮らした村のようです。

それでは鍛冶工房跡を詳しく見てみましょう。この工房跡の大きさは一辺がおよそ4mの方形で、掘り込まれた床面には一般的な竪穴住居跡に見られる煮炊き用に火をたいた炉跡のほか、

床面の中央には鍛冶炉と呼ばれる鍛冶作業専用の火を焚いた跡が確認されました。その鍛冶炉のすぐ脇には、鍛冶職人が赤く熱した鉄を打ち鍛えるための台石を据えた痕跡も見つかりました。

この工房跡で見つかった出土品には、台石破片やファイゴの羽口と呼ばれる鍛冶炉を高温にするための送風装置の部品があり、鉄素材の精製過程などで排出される鉄滓も見つかりました。このほか、床面には鍛冶作業で飛び散った微細な鉄片が見つかりました。

しかしながら、村の跡ではこの工房跡で作られた鉄の道具が発見されず、ほかの村に供給されたり、職人の移動とともに持ち去られてしまったのかも知れません。この鉄の道具の存在を間接的に示すものとして、村の跡では砥石が出土しており、鋭い刃先を持つ道具の存在が想定されます。

最後に、この鍛冶工房跡で用いられた鉄素材についてですが、出土品の科学分析の結果では、遠く離れた朝鮮半島で生産されたものと考えられています。

八幡脇遺跡や尻替遺跡から出土した鍛冶作業にかかわる出土品を、上高津貝塚ふるさと歴史の広場で展示しています。ぜひご覧ください。

上高津貝塚ふるさと歴史の広場(☎826・7111)



八幡脇遺跡の鍛冶工房跡

鍛冶作業にかかわる出土品…ファイゴの羽口(上)、鉄滓(下右)、鉄の塊(下中)、台石破片(下左)。上左のみ尻替遺跡出土、ほかは八幡脇遺跡出土。

